高校心理学導入に関する一研究
—生徒及び教師の意識調査結果からの検討—

大辻隆夫（児童学科助教授）　塩川真理（本学非常勤講師，臨床心理士）
加藤征宏（大阪府教育委員会SCSV 臨床心理士）　松葉健太朗（奈良県立高円高等学校教諭）

［抄録］

本研究の目的は，高校心理学導入の是非に関する基礎資料の収集及び導入にあたっての課題を明確にすることにある。高校2年生252人（男子96人，女子156人）及び教員42人を対象に調査及び考察をおこない，次の知見を得た。

(1) 高校生は全体として高校心理学への関心を高く示し，とくに女子が積極的な関心を示した。

(2) 高校生及び教員が，高校心理学の内容として期待する領域は，高校生で1位心理検査，2位コミュニケーション，3位カウンセリングであり，教員では1位メンタルヘルス，2位コミュニケーション，3位青年心理学であった。

(3) 高校心理学の授業担当者として，高校生及び教師のいずれもが臨床心理士による授業を望んだ。

(4) 教師は，高校心理学を新教科として設置すること，あるいは総合学習の授業時間を利用して教えることに関心を示した。

これらの知見を受けてあえて提案するならば，高校心理学は，総合学習ないしは選択制教科として導入し，現時点では現在配置されている臨床心理士であるスクールカウンセラーを授業担当者として活用することが一案として考えられる。

キーワード：高校心理学，高校生及び教師への意識調査，臨床心理士の活用，総合学習，選択制教科

目　的

Fisher ら[1]によれば，アメリカの大学教育以前の学校教育における心理学教育は，Nebergall[2]が研究した時点で，およそ100年以上の歴史があり，これを前提とすれば，それから現在に至る迄にさらに40年近く，約140年経過していることになる。例えば，1965年の段階で，すでに全米50州のうち49州において，高校心理学のコースが設置されている[3]ことは注目に値する。Engle[4-6]や Fischer[7]は，高校心理学を Social Studies curriculum の1つとして定義づけており，例えばアメリカでは，高校心理学は，学校や州によってその内容や質が異なる[3]とはいえ，1960年代前後から，高校生の個別的問題の解決に寄与するための mental health や individuality の分野を軸に学習プランが構築されつつあった[6]。

一方，わが国では，大学教育以前の学校教育における心理学教育は様々な教科の中に織り込まれて発展してきた経緯があり[6)8-10]，体系づけられた高校心理学として成立していないのが現状である。高校心理学導入に関する現場教員の提言[11,12]に見られる通り，現在の高校生は，心理学や臨床心理学に関する専門的知識の学習や実践に関心を示しており，高校生の要望とわが国の高校教育の現状とは大きく隔たりがあると言

わざるを得ない。

また，先述の学習プラン[6]のような青年の個別的な問題解決に心理学的知識が有用であるばかりでなく，心理学教育は，最近のわが国に多発している，不登校・いじめに代表される青少年問題[14]の解決，及び彼らの心の健康とその増進にも寄与するものと考えられる。

最近，新たな試みとして総合学科の公立高校の一部に，高校心理学が選択科目の一つ[13]として実際に導入されつつあり，公立高校における高校心理学の一般化，つまり高校心理学導入について具体的に検討されるべき段階に達しているのではないかと考えられる。さらに，先のEngle[6]も示唆しているように，大学教育以前の段階で，特に高校における心理学教育が誰によって，またどのような内容について教えられるべきか，心理学教育の現状と課題について検討することが必要であろう。

このような問題意識に立ち，本研究をおこなう目的は以下の2点にある。

第1に，高校教育において，高校生のための心理学教育（高校心理学）導入について，高校生自身及び高校教育現場のスタッフの現段階での関心・意識について調査すること，

第2に，この調査結果の分析を通して，今後高校心理学を導入する場合に生起するであろうと予測される課題について考察すること，

である。

方　法

本調査は，高校における心理学教育導入の是非に関する設問及びその導入形態に関する設問から構成されている。この高校心理学に関する意識調査の対象及び手続きについて順に示す。

対象：近畿圏内の公立高校に在学する2年生252人（男子96人，女子156人）及び教員42人。

手続き：高校生に「高校生のための心理学教育（高校心理学）導入に関するアンケート（生徒用）」（表1）を，教員に「高校生のための心理学教育（高校心理学）導入に関するアンケート（教員用）」（表2）を実施した。高校心理学導入に関するアンケートは，①高校で心理学を学ぶ，あるいは心理学授業を提供することへの関心を尋ねる質問項目群と②心理学教育が導入されるとした場合に希望するもしくは予想し得る授業形態を尋ねる質問項目群で構成されている。

結　果

生徒及び教員の意識調査の集計結果について自由記述回答の結果を除く全結果を表3及び表4にそれぞれ示した。

次いで①高校心理学の導入の是非に関する質問項目及び②心理学教育導入の形態に関する質問項目について設問ごとに自由記述回答の結果と併せて提示する。

表1　生徒用意識調査

1　性別をお答えください。　(1)男　　(2)女
2　学年をお答えください。　(　　)年
3　高校で心理学（高校心理学）を学ぶことについてどのように思いますか。
　(1)賛成　(2)反対　(3)どちらとも言えない
4　3の回答理由をお書きください。

5　高校で心理学（高校心理学）という授業があれば，選択しますか。
　(1)選択する　(2)選択しない　(3)分からない
6　5の回答の理由をお書きください。

7　高校で心理学（高校心理学）が導入されるとすれば，どのような形態が望ましいでしょうか。以下の設問にお答えください。
(1)　誰が教えるのが適当だと思われますか。
　①一般教諭　②養護教諭　③臨床心理士
　④精神科医　⑤大学教員　⑥その他
(2)　(1)の回答の理由をお書きください。

(3)　どのような授業内容が望ましいと思いますか。（複数回答可）
　①カウンセリング　②心理検査　③コミュニケーション
　④青年心理学　⑤メンタル・ヘルス　⑥その他
(4)　(3)の回答の理由をお書きください。

(5)　どのような授業形式が望ましいと思いますか。（複数回答可）
　①講義　②実習（ロール・プレイングなど）
　③見学　④その他
(6)　(5)の回答の理由をお書きください。

8　その他ご意見があれば自由にお書きください。

表2　教員用意識調査

1　高校で心理学（高校心理学）を教えることについてどのように思いますか。
　(1)賛成　(2)反対　(3)どちらとも言えない
2　1のご回答の理由をご記入ください。

3　高校に心理学（高校心理学）教育が導入されるとすれば，どのような形態が望ましいでしょうか。
(1)　誰が教えるのが適当だと思われますか。
　①一般教諭　②養護教諭　③臨床心理士
　④精神科医　⑤大学教員　⑥その他
(2)　(1)の回答の理由をご記入ください。

(3)　どのような教科で教えるのが適当だと思われますか。（複数回答可）
　①国語　②地歴公民　③数学　④理科　⑤英語
　⑥保健体育　⑦家庭　⑧芸術　⑨情報
　⑩総合学習　⑪HR　⑫高校心理学　⑬その他
(4)　(3)のご回答の理由をご記入ください。

(5)　どのような授業内容が望ましいと思われますか。（複数回答可）
　①カウンセリング　②心理検査　③コミュニケーション
　④青年心理学　⑤メンタル・ヘルス　⑥その他
(6)　(5)のご回答の理由をご記入ください。

(7)　どのような授業形式が望ましいと思われますか。（複数回答可）
　①講義　②実習（ロール・プレイングなど）
　③見学　④その他
(8)　(7)の回答の理由をご記入ください。

4　高校生のための心理学教育（高校心理学）導入につきまして，その他ご意見がございましたらご記入をお願いいたします。

表3　生徒への意識調査結果

No.	質問	選択項目	回答者（人）		
			男子	女子	計
1	高校で心理学（高校心理学）を学ぶことについてどのように思いますか。	賛成	55	108	163
		反対	12	3	14
		どちらとも言えない	29	45	74
2	高校で心理学（高校心理学）という授業があれば選択しますか。	選択する	38	88	126
		選択しない	22	20	42
		わからない	38	88	126
3	誰が教えるのが適当だと思われますか。	一般教諭	5	14	19
		養護教諭	0	1	1
		臨床心理士	44	14	117
		精神科医	33	43	76
		大学教員	13	21	34
		その他	6	7	13
4	どのような授業内容が望ましいと思いますか。	カウンセリング	29	51	80
		心理検査	38	89	127
		コミュニケーション	32	50	82
		青年心理学	30	41	71
		メンタルヘルス	15	35	50
		その他	7	6	133
5	どのような授業形式が望ましいと思いますか。	講義	42	56	98
		実習	65	121	186
		見学	19	36	55
		その他	1	5	6

表4　教員への意識調査結果

No.	質問	選択項目	回答者（人）
6	高校で心理学（高校心理学）を教えることについてどのように思いますか。	賛成	22
		反対	8
		どちらとも言えない	12
7	誰が教えるのが適当だと思われますか。	一般教諭	7
		養護教諭	1
		臨床心理士	23
		精神科医	8
		大学教員	9
		その他	10
8	どのような教科で教えるのが適当だと思われますか。	国語	0
		地歴公民	0
		数学	0
		理科	0
		英語	0
		保健体育	3
		家庭	0
		芸術	0
		情報	0
		総合学習	17
		HR	6
		高校心理学	18
		その他	9
9	どのような授業内容が望ましいと思いますか。	カウンセリング	9
		心理検査	9
		コミュニケーション	22
		青年心理学	20
		メンタルヘルス	25
		その他	12
10	どのような授業形式が望ましいと思いますか。	講義	25
		実習	31
		見学	9
		その他	9

①心理学導入に関する意識調査結果

「高校で心理学を学ぶ／教えることについてどのように思われますか」の質問に対して，図1に示すように高校生全体の65%が「賛成」と回答している。導入に「反対」と回答した割合

は男子で13%，女子２%であり，女子との比較では男子が導入に消極的である。教員では，「導入賛成」が52%と過半数を越えたものの，19%が「反対」と回答している。回答理由を表５に示す。生徒にはさらに「実際に高校心理学という授業があれば選択しますか」（図２）という設問を設けたが，「選択する」と回答した生徒は女子56%，男子35%，全体では50%である。男子の23%，女子の13%は「選択しない」と回答し，全体としては女子の選択希望者が男子を上回っている。回答理由については表６に示す。

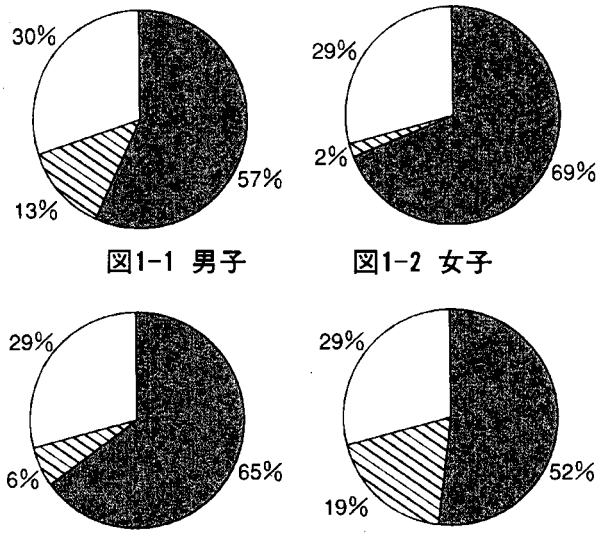

図1-1 男子　図1-2 女子

（▩賛成 ▧反対 □どちらとも言えない）

図1-3 生徒合計　図1-4 教員

図１　高校心理学という授業があれば選択しますか

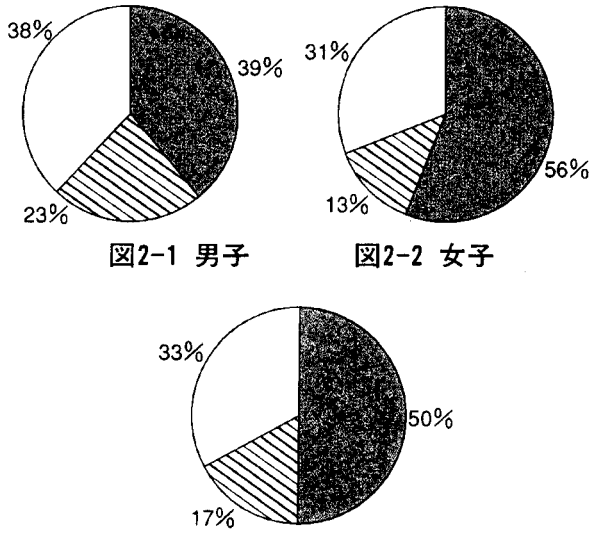

図2-1 男子　図2-2 女子

（▩選択する ▧選択しない □わからない）

図2-3 生徒合計

図２　高校心理学という授業があれば選択しますか

表５　高校心理学導入への賛成／反対理由

表5-1　「賛成」と回答した人の回答理由

回答者		回答理由
生徒	男子	a．相談の乗り方を学びたい。(相手の悩みをどうやったら解決できるか学びたい。) b．早くからキャリアを積むほうがいい。
	女子	a．心理学を学ぶことで不安や悩みを解決していけるかもしれない。 b．心理学に興味を持っている。カウンセラーもやってみたい。
教員		a．最近の傾向として多くの高校生が心理学に興味を持っている。「自己と向き合う」「他者を理解する」ひとつの方法として心理学的知見を身につける機会を持つのは望ましい。

表5-2　「反対」と回答した人の回答理由

回答者		回答理由
生徒	男子	a．他の勉強が出来なくなる。 b．心理学を大学でやりたいと思っている人にしか意味のない授業。
	女子	a．心理学を学べる機会ができることはよいが，そんなに授業時間をとっていられない。
教員		a．高校での専門教育（心理に関して）は必要ない。 b．そんな余裕はない。以下回答の必要なし。 c．学校５日制（スリム化）の逆行になる。

表６　高校心理学選択／非選択の理由

表6-1　「選択する」と回答した人の回答理由

回答者		回答理由
生徒	男子	a．学べる機会があればぜひ学んでみたい。
	女子	a．なりたい職業にもいりそう。 b．心理学に興味があり，前々からやってみたいと思っていた。

表6-2　「選択しない」と回答した人の回答理由

回答者		回答理由
生徒	男子	a．興味はありますが勉強のほうは。
	女子	a．選択まではいかないが，普通の授業よりは楽しそう。 b．どのような授業をするかはっきりわかってから決めたい。

②心理学教育導入の形態に関する質問項目

a）誰が教えるのが適当だと思われますか：この質問に対する回答を図3に，その回答理由を表7に示す。生徒・教員ともに臨床心理士を最適と考えている者が最も多かった。第2位以下は，生徒では精神科医，大学教員，一般教員，養護教諭と続き，教員では第2位は大学教員，次いで精神科医，一般教諭，養護教諭という結果であった。

b）どのような教科で教えるのが適当だと思われますか：この質問は教員のみに尋ねた。この質問に対する回答を図4に，回答理由を表8に示す。既存の教科の中でおこなうのではなく，「高校心理学という教科を新設する」という回答が最も多数を占めた。

c）どのような授業内容が望ましいと思われますか：この質問に対する回答は図5に，回答理由を表9に示す。生徒では心理検査，コミュニケーション，カウンセリング，青年心理学，メンタルヘルスの順に希望が出されたが，教員ではメンタルヘルスが1位であった。

d）どのような授業形式が望ましいと思われますか：この質問に対する回答を図6に，回答理由を表10にあげる。生徒・教員ともに第1位が実習（ロール・プレイングなど），第2位が講義であった。

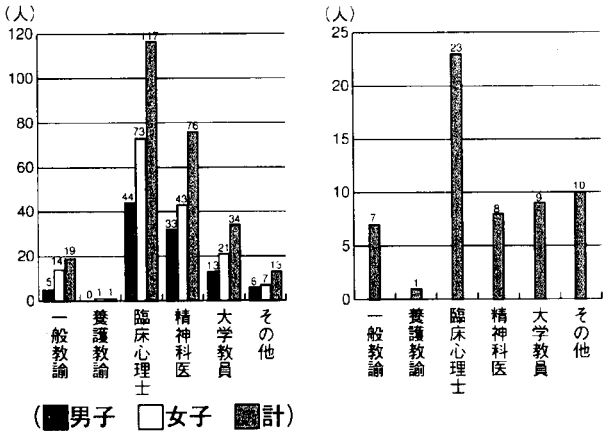

図3-1 生徒　　図3-2 教員

図3　誰が教えるのが適当と思われますか

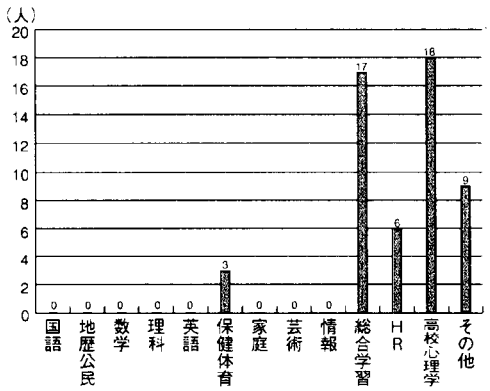

図4　どのような教科で教えるのが適当と思われますか

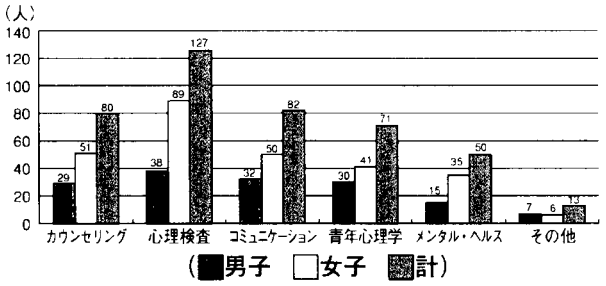

図5-1 生徒

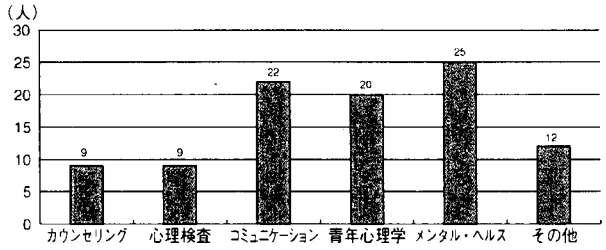

図5-2 教員

図5　どのような授業内容が望ましいと思われますか

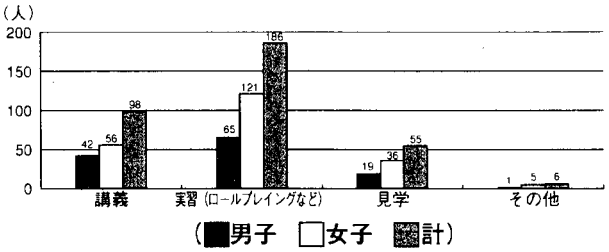

図6-1 生徒

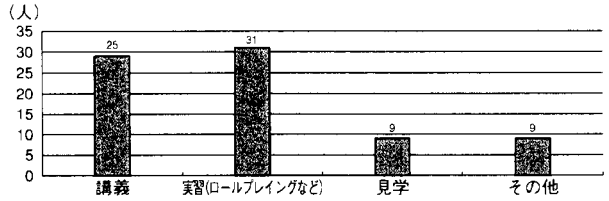

図6-2 教員

図6　どのような授業形式が望ましいと思われますか

e）高校心理学導入に関するその他の意見を求めたところ，高校生女子より「心理学を学ぶ機会があれば楽しいと思うので，ぜひ心理学を導入してほしい」等の意見が示された（表11）。

表11　その他の意見

回答者		回答理由
生徒	男子	a．高校心理学を学ぶということは早くからやりたいことを学べるので良い。 b．このアンケートがもっと前にあり，高校入学時にはすでに心理学が勉強できる環境になっていれば良かった。
	女子	a．心理学を学ぶ機会があれば楽しいと思うのでぜひ心理学を導入して欲しい。 b．ぜひ取り入れて欲しい。進路に直接関係なくてもやってみたいし，知って損をすることはない。 c．現在の授業スタイルはストレスがたまる。 d．国語とか数学の勉強もやらないといけないが，人間の心理を学ぶことも大切。
教員		a．なんらかの形で取り入れることができればと思う。 b．最近の高校生を見ていて，精神的な弱さや心理的な屈折に起因する問題行動があると感じる。例えば心理学を学習することによって自分の心を分析し，自分の進むべき道を切り開くモチベーションの一つとなってくれることを期待したい。

考　察

1．高校心理学導入に関して

本調査結果から，高校生は男女共に高校心理学導入に好意的である者が過半数を超えることが明らかになった。とくに女子では導入賛成が7割近くを占め，高校心理学導入への積極的関心が伺われる。導入賛成の理由としては男女共に「不安や心の問題の解決の仕方，相談の乗り方を学びたい」といった具体的な技法を習得することへの期待が寄せられていることがわかる。さらに「職業的キャリアを早くスタートできる，カウンセラーをやってみたい」（表5-1）等の回答に示されるように，将来の職業選択に有用なものとして高校心理学導入を位置づけている高校生がいる。教員では他者理解・自己理解を促すという見知から導入に賛成という意見があげられた。

導入に「反対」とする意見は，女子では2％に留まったが男子で13％，教員では19％に上った。いずれも導入賛成と比較すると少数であるが，「反対」の回答理由を見てみると生徒では「他の勉強ができなくなる」ことへの懸念，「心理学をやりたいと思っている人にしか意味がない」（表5-2）等高校心理学導入への心理的負担感が表明された。また教員においては，「そんな余裕はない。以下回答の必要なし」「学校5日制（スリム化）の逆行になる」（表5-2）等の回答に示唆されるように，現在のカリキュラムだけで手一杯といった現状が伺われる。

高校心理学の選択については生徒のみに回答を求めたが，男子で39％，女子で56％，全体で50％が高校心理学を「選択する」と回答した。その理由としては「機会があればぜひ学んでみたい」「なりたい職業にいりそう」等の意見があげられ，心理学への関心の高さを示唆している。「選択しない」生徒は13％～23％であるが，その理由は「選択まではいかないが普通の授業より楽しそう」に代表される既存の授業からの変化を望む意見，「どのような授業をするかはっきり分かってから決めたい」等の慎重派，また「興味はありますが勉強のほうは」（表6-2）といったさらなる学習負担を懸念する意見が表明された。このことから一見するとこれらの回答は心理学への無関心を示すものと誤解される懸念が予想されるが，実態はむしろ心理学への関心と，新たな科目導入による学習負担感の狭間に生じた葛藤を表明しているものと考えられる。

2．心理学教育導入の形態について

本調査において，もし高校心理学という授業が導入されるとした場合，どのような授業形態を望んでいるか，あるいは適切と考えているかを調査した。その内容は，授業担当者，実施教科（教員のみ），授業内容，授業形式の4項目である。なお，これは最初の設問で高校心理学導入に賛成と回答した生徒及び教員のみが回答したものである。

高校心理学の授業担当者として，高校生及び

教員のいずれもが臨床心理士を「最も適切」と回答し，臨床心理士による授業を最も望んだ。「精神科医は反対。薬を使って治す人よりカウンセラーの方が話を聞きやすい」「心のケアをしつつできそう」（表7）等の回答に示唆されるように，臨床心理士とコミュニケーションをもつこと自体が，自己の悩みや不安の理解と解決に寄与する機会と認識し，期待を抱く高校生女子がいることが伺われる。

心理学教育を実施する際の教科について教員に尋ねたところ，高校心理学という新教科の設置を求める声が最も多く，ついで総合学習に取り入れる，という結果であった。中には「HRや他教科でお茶を濁すのではなく，高校3年間にわたるカリキュラムに基づく指導が必要」「悩める生徒も多い状況の中では，新教科を設けて教えるか，総合学習として取り入れる方がよい」（表8）等の回答が示され，高校心理学を新教科として設置する，あるいは総合学習の授業時間を利用して心理学教育を導入することに対し，非常に積極的な意見が教員から提示された。

授業内容に関する質問では，高校生は心理検査を，教員はメンタルヘルスを第1位にあげている。内容選択の理由として，高校生では「内面にある傷がわかる」「自分ではわからない心の悩みがわかりそう」等，自己理解・自己探求への動機が高いことがわかる。コミュニケーション希望の生徒からは「人間関係が大事」「話すことから何もかも始まる」（表9）等の回答があり，これに示唆されるように，コミュニケーションを個人の人生や成長にとって必須の内容[13]と捉えている高校生の存在が伺われる。カウンセリング希望の生徒からは，授業において日頃の悩みを話し，解決することを期待している意見が挙がった。さらに，「その他」を選択した生徒から，「苦しいときの気持ちの持ち方を勉強したい」という意見が出され，疾風怒濤の青年期最中にある高校生の心の内面が吐露されたものと解釈できよう。これらの回答理由を含めて考察すると高校心理学の授業を通して，高校生らが自己の悩みの背景にある不安の理解と解決[15,16]を求めていることが予測される。

教員においても「学術的なことではなく心のケアを中心とした方向」，あるいは「生徒が必要とする内容を」「自分とじっくり向き合う機会を与えたい」等の意見が出され，生徒と同様に直接高校生自身にケア的要素及び心の成長を促すような授業内容を求めていることが明らかとなった。

高校心理学の授業形式について，高校生及び教員のいずれもが実習形式を希望した。高校心理学を将来の職業選択に有用なものとして位置づけている高校生女子もいたが，「講義より実際にやった方が身に付き面白そう」「自分も人のカウンセリングをしてみたい」（表10）等の回答に示唆されるように，将来の職業選択と関連した実践が授業内容に取り入れられることを希望する女子がいることも伺われる。

3．現状と課題

アメリカの高校生や大学生を対象としたPlotnik[17]の心理学テキストIntroduction to Psychologyを見ると，DSM-Ⅳ-TRを中心としたMental Disorderや精神分析からEMDRに至るTherapy理論が記載されるなどわが国のものに比してより多くの専門的知識が若い人たちに紹介されている。このことは，今後のわが国の高校心理学導入におけるひとつの示唆として受け止める必要があると言えよう。

近年，導入への慎重論[18,19]も一部には指摘されていたところではあるが，現在では臨床心理士がスクールカウンセラー（school counselor）として中学校を主体に配置されるようになり，スクールカウンセラー全体の9割を占める迄になった[20,21]。伊藤[22,23]は，スクールカウンセラー導入前後の質問紙調査を通じて，導入に関する教員の不安が導入後には軽減し，スクールカウンセラーに一定の評価を与える迄になったことを実証している。また，河合[24]は，現場との摩擦が当初の予想ほどではなく，スクールカウンセラーが学校内で機能していると述べ，文部科学省の北見[25]及び徳重[21]は教員によるスクールカウンセラー活用実績を評価し，今後の活用拡大の見通しについて言及している。これらの点を

見る限り，スクールカウンセラーが学校や教員によって受け入れられるようになっていると判断できよう。

つまり，高校生及び教員のいずれもが高校心理学の教授者として臨床心理士を希望し，且つ臨床心理士がスクールカウンセラーとして学校現場において認知される迄になっている現状，さらには導入に伴う仕事量増加や教授負担を予測する教員が存在する先の結果とを考え合わせるならば，臨床心理士の新規導入よりはむしろ，現在高校のスクールカウンセラーとして配置されている臨床心理士を高校心理学の授業担当者として活用することが，高校心理学を導入する現実的形態ではないかと考えられる。ただし，現段階において，中学校に比べると格段にその数が少ないと言わざるを得ない高校へのスクールカウンセラー配置[26]については，将来的な増員が求められることは言う迄もない。

高校心理学を新教科として設置するにしても，現時点で受験教科の時間数減少を不安視する教員がいることを鑑みるならば，総合学習の授業時間の一部を高校心理学の時間として割り当てる等，受験教科の時間数を減少させない工夫も必要であろう。また学習すべき教科が増えるということは生徒にとっても負担であり，これを考慮するならば，主体的な授業選択の機会を与える選択教科として高校心理学を導入するのも一案である。

実際に，公民(倫理)や総合学習の授業の一環として，また自習時間を活用し，1ないし2時間のロールプレイングによる心理学教育実践をおこなった報告がある[27]。また福祉科に在籍する高校生に対する介護技術訓練の一環としてカウンセリング実習が取り入れられ始めている[28]。

今回，期末試験や他の学校行事が重なる超多忙の時期にもかかわらず，全体の約15%の教員が本調査に協力し，高校心理学導入に関する自己の意見を明確に示したことは，賛否を述べる次元に留まらず，現在の高校教育は勿論，高校心理学教育に向けての積極的な関心を示唆するという意味においても，真に意義深いものであろう。また，「心理学を学ぶ機会があれば楽しいと思うので，ぜひ心理学を導入してほしい」(表11) 等，高校心理学導入を切実に願う高校生の存在も看過することはできない。このようなことから，今回の結果を真摯に受け止め，今後高校心理学導入の実現に向けて本腰を入れた具体的検討が求められるといえよう。

結　論

今回の研究において，高校生は高校心理学導入に対して積極的関心を示した。とくに女子でその傾向が高い。また決して数は多くないが調査に応じた教員からも心理学導入を支持する回答が過半数を超えた。これを踏まえて，検討をおこなった結果，以下の2点を結論として得た。

(1) 現時点では，高校心理学を総合学習ないしは選択教科として導入し，スクールカウンセラーを授業担当者として活用することが一案として提案できる。

(2) 今回の結果を踏まえ，導入の実現に向けて具体的検討が求められる。

本研究の一部は，日本精神衛生学会第17回大会(2001.10.8) において発表されたものである。

文　献

1) Fisher H, Gray GS, Weiss E : Needs and Objectives in High School, In Fisher H (Ed) : Development in High School Psychology, Behavioral Publications, New York, pp10-18, 1974.
2) Nebergall NS : A Study of the Teaching of High School Psychology and a Proposed Text Plan. Doctoral dissertation, University of Oklahoma : 1965.
3) Thornton BM : A National Survey of the Teaching of Psychology in the High School. Doctoral dissertation, Duke University, 1965.
4) Engle TL : A National Survey of Teaching of Psychology in High Schools. 467-471, The School Review 59(8) : 31-35, 1951.
5) Engle TL : Teaching of Psychology in High Schools. The American Psychologist 7 (1) : 1952.
6) Engle TL : High School Psychology : Past Trends and Future Hopes. In Fisher H

(Ed)：Development in High School Psychology, Behavioral Publications, New York, pp23-43, 1974.
7) Fisher H：Educational Currents in Pre-College Psychology. In Fisher H (Ed)：Development in High School Psychology, Behavioral Publications, New York, pp3-9, 1974.
8) 北村丕：高校生のエンカウンターグループ．村山正治(編)：講座心理療法7，エンカウンターグループ，福村出版，東京，pp73-88, 1977.
9) 諸富祥彦：学校現場で使えるカウンセリング・テクニック上．誠信書房，東京，1999.
10) 大津一義：子どものメンタルヘルス問題の支援システムづくりをめざして．こころの健康15(2)：30-33，2000.
11) 松葉健太朗：高校に心理学を，青少年に楽しさを―21世紀の小さな一歩から．日本精神衛生学会MENTAL HELTH NEWS LETTER47：2-3，2000.
12) 谷嶋喜代志：定時制高校と心理学．心理学ワールド13：30，2001.
13) Langs R：Unconscious Communication in Everyday Life. Jason Aronson, Inc, New York, 1983.
14) 守口地域新高校（総合学科）資料集：2001.
15) Jersild AT：When Teachers Face Themselves. Teachers College, Columbia University. 1955.
16) Bordin ES：Psychological Counseling. Appleton-Century-Crofts, Inc. New York, 1955.
17) Plotnik R：Introduction to Psychology 6th Edition. Wadsworth-Thomson Learning, Pacific Grove, CA, 2002.
18) 北村陽英：学校精神衛生のあり方．馬場謙一(編)，現代のエスプリ330，学校臨床，至文堂，東京，pp161-175，1995.
19) 國分康孝：学校カウンセリングの基礎．馬場謙一（編）現代のエスプリ330，学校臨床，至文堂，東京，pp176-186，1995.
20) 大塚義孝：臨床心理士とスクールカウンセラー．臨床心理士報12(1)：13-16，2000.
21) 徳重眞光：臨床心理士への期待．臨床心理士報13(1)：1-2，2002.
22) 伊藤美奈子，中村健：学校現場へのスクールカウンセラー導入についての意識調査―中学校教員とカウンセラーを対象に―．教育心理学研究46(2)，1-10，1998.
23) 伊藤美奈子：学校側から見た学校臨床心理士〈スクールカウンセラー〉活動の評価―全国アンケート調査の結果報告．臨床心理士報11(2)：21-42，2000.
24) 河合隼雄：座談会を終えて．精神療法24(2)：20，1998.
25) 北見耕一：臨床心理士への期待．臨床心理士報12(1)：1-2，2000.
26) 京都市教育委員会：平成15年度京都市スクールカウンセラー活用事業の手引き．京都市教育委員会事務局指導部生徒指導課，2003.
27) 石井研吉，石井尚子，松葉健太朗：高校生を対象とするイヌバラ法の実践―その目的と効果―．第25回TCIカウンセリングワークショップ　シンポジウム「イヌバラ法の訓練効果を巡って」．2002
28) 大辻隆夫，塩川真理，上川貴子他：イヌバラ法による福祉科高校生に対する介護コミュニケーション技術の訓練効果．京都女子大学児童学研究第34号．2004

表7　適当と思われる授業担当者の選択理由

生徒			教員	
選択項目	選択理由		選択項目	選択理由
	男子	女子		
臨床心理士(1)	a．薬を使わず,心理学のことを知っていそう。 b．資格等を持つ人の方が詳しく教えられる。例えば一般教諭等は心理学を勉強してから生徒に教えるとあまり詳しく教えられない。	a．精神科医は反対。薬を使って治す人よりカウンセラーの方が話を聞きやすい。	臨床心理士(1)	a．一般教員では知識や素養のばらつきが大きく不安。資格を持った人が望ましい。 b．何事も最初が肝心。生半可なことを教えるよりも正しく系統立てて教えていかなければ興味から次の段階に入れない。
精神科医(2)	a．知識を詰め込むだけでなく，実体験を交える方が興味も湧く。リアルな話の方が胸に刻まれる。	a．心のケアをしつつできそう。 b．本物の医者ならリアルな話を聞ける。	大学教員(2)	a．深く高い見識，教養のある人が望ましい。
大学教員(3)	a．心理学を担当している。	a．大学で教えているようなことを学びたい。	精神科医(3)	
一般教諭(4)	a．医者だと生徒を患者のように見そう。	a．心理学だけを教える人に拒否反応を起こす人もいる。	一般教諭(4)	a．一般教員以外がよい場合もあるが,通常は一般教員がよい。席に座らせて授業体制を取らせるためのサポートが大変。自分たちでやる方が楽。
養護教諭(5)	a．気持ちが入りそう。		養護教諭(5)	
その他			その他	

(　)は被選択回数順位

表8　適当と思われる心理学教育導入教科の選択理由

選択項目	選択理由
高校心理学(1)	a．新科目を創設する。 b．HRや他教科でお茶を濁すのではなく，高校3年間にわたるカリキュラムに基づく指導が必要。
総合学習(2)	a．悩める生徒も多い状況の中では，新教科を設けて教えるか，総合学習として取り入れる方がよい。
HR(3)	a．高校心理学の時間の増設は困難。HRなら青少年問題を通し，心理学の授業をすることも可能。
保健体育(4)	a．保健の授業に専門家の講義が入るのがよい（「高校心理学」との複数回答）。

(　)は被選択回数順位

表9　望ましいと思う授業内容の選択理由

生徒			教員	
選択項目	選択理由		選択項目	選択理由
	男子	女子		
心理検査(1)	a．内面にある何か傷がわかる。	a．心理検査は興味がもて,授業も充実する。 b．自分ではわからない心の中の悩みとかがわかりそう。	メンタルヘルス(1)	
コミュニケーション(2)	a．人間関係が大事	a．具体的にどういうことをするのかわからないがカウンセリングとか一度受けてみたい。	コミュニケーション(2)	a．心理学でも学術的なことではなく，心のケアを中心とした方向が望ましい。
カウンセリング(3)	a．ストレスがたまっている人には悩みがあるはず。	a．カウンセリングで日頃の悩みを打ち明けるのはよい。 b．話すことからなにもかも始まる。	青年心理学(3)	
青年心理学(4)	a．授業が楽しくなりそう。	a．自分のことを知りたい人もいるし，悩みを解決したい人もいる。	カウンセリング(4)	a．実施しないと何が適当かわからないが，生徒が必要とする内容を授業で取り入れてほしい。
メンタルヘルス(5)	a．現在の自分を知るべき。	a．現在の問題への向き合う力になる。	心理検査(4)	a．自分とじっくり向き合う機会を与えたい。
その他	a．苦しいときの気持ちの持ち方を勉強したい。		その他	

(　)は被選択回数順位

表10　望ましいと思う授業形式の選択理由

生徒			教員	
選択項目	選択理由		選択項目	選択理由
	男子	女子		
実習(ロールプレイングなどを含む)(1)	a．もちろん講義は必要として，実習という形が一番身につく。 b．いろいろなことを取り入れた方が楽しく学べる。(実習・講義・見学の複数回答)	a．講義より実際にやった方が身に付きおもしろそう。	実習(ロールプレイングなどを含む)(1)	a．理論,実習があれば効果的。 b．講義形式ではなく，他者との関わりの中で「心の健康」を得る方が役立つ。 c．授業が進むといろいろな要求が出ると思われる。実力を伸ばしていけるような形式。
講義(2)	a．気楽に授業が受けられる。	a．聞いているだけでも面白そう。 b．自分も人のカウンセリングをしてみたい。	講義(2)	
見学(3)		a．目で見て体験しないと本当に身につかない(実習との複数回答)。	見学(3)	

(　)は被選択回数順位

A Study on Introduction of High School Psychology: An Analysis of Students' and Teachers' Concerns regarding the Introduction of High School Psychology in the School Curriculum

Takao OTSUJI　Mari SHIOKAWA
Yukihiro KATO　Kentaro MATSUBA

SUMMARY

The purpose of this study was to collect fundamental materials concerning the introduction of high school psychology and to elucidate any assignment for introduction. The subjects of this study were 252 second year high school students (96 boys, 156 girls) and 42 teachers. After analysis of their answers, the following considerations were made:

(1) High school students were concerned about the introduction of high school psychology as a whole. Especially, girls were remarkable for their concern.

(2) The aspects which high school students were most concerned with were ranked in the following order: 1. psychological assessment; 2. communication; 3. counseling. The aspects for teachers were: 1. mental health; 2. communication.

(3) High school students and teachers wanted high school psychology taught by clinical psychologists.

(4) Teachers were concerned about establishing high school psychology as an independent subject or taking advantage of periods for integrated study to teach high school psychology.

Based upon the above considerations, we concluded that it would be appropriate to introduce high school psychology into a period for integrated study or as an elective subject through the use of school counselors.

Key words: high school psychology, students' and teachers' concerns, use of clinical psychologist, period for integrated study, elective subject.